

平成二十二年

国
語

(60分 120点)

注
意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数を確かめてから始めなさい。
- 三 問題は十六ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはつきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校五年生の文弘(ふみひろ)は、友達(ゆうどう)の雄二(ゆうじ)と夏休み(なつやすみ)の間に、町のどこかに埋(う)まれているらしい不発弾(ふはつだん)を探(さが)していた。そこに転校生(たんこうせい)の高井(たかい)も加(か)わったが、ささいなことでブン(ぶん)は雄二(ゆうじ)と言(い)い合(あ)いになり、雄二(ゆうじ)の家の仕事(しごと)である汲み取り屋(くみとりや)の理(り)する仕事(しごと)をバカにしたことを言(い)ってしま(い)う。それ以来(いらい)ぎくしゃくしていた二人(ふたり)だったが、仲直(なかつち)りした方がいいと高井(たかい)にブン(ぶん)はすすめられた。

高井(たかい)が帰(かえ)って昼(ひる)ご飯(ごはん)を食(た)べてから、しばらくゴロゴロしていたけど、どうにも高井(たかい)に言(い)われたことが気(き)にかかつて、僕(ぼく)は起き上(た)がった。

「ああ、もうっ、くっそー。ちょっと行(い)ってみるか」

謝(あやま)るんじゃない、ただ様(よう)子(こ)を見(み)に行(い)くだけだ。僕(ぼく)は自転車(じてん차)に跨(また)がって雄二(ゆうじ)ちゃんちへ向(む)かった。気が進(すす)まない分(ぶん)、漕(こ)ぐペダルは重(おも)く、テリつける太陽(たいやう)が憎(にく)らしく思(おも)えた。

① 雄二(ゆうじ)ちゃんちが近づくと、ゆっくりとペダルを漕(こ)いだ。

もし会(あ)ったら最初(さいしょ)になんて言(い)えばいいんだ？

僕(ぼく)は言葉(ことば)が見(み)つからず、そのまま雄二(ゆうじ)ちゃんちの前(まえ)を通過(たうぐう)した。そして角(かく)を三回(さんかい)曲(まが)がって、もう一度、雄二(ゆうじ)ちゃんちの前(まえ)に回(まわ)り込(こ)んだ。でも、また通過(たうぐう)した。

向(む)こうから僕(ぼく)を見(み)つけてく(き)て声(こゑ)を掛(か)けてくれないかな。そんなことを考(かん)えた。同じ道(みち)をぐるぐると四週(ししゅう)しかけたときだった。

雄二(ゆうじ)ちゃんちの玄関(げんかん)扉(ひら)が開(ひら)いて誰(だれ)かが出(で)てきた。雄二(ゆうじ)ちゃんのかあちゃんだ。僕(ぼく)はその姿(すがた)に気(き)づかないフリをして、スピードを落(お)すとメセン(メセン)をペダルの方(かた)へ下(くだ)げた。

「あら、ブンちゃん」

おばさんが僕(ぼく)に気(き)づき名(な)前(まえ)を呼(よ)んだ。

僕(ぼく)はいかにも今(いま)やってきたように、おばさんの前(まえ)で自転車(じてん차)を降(くだ)りた。

「こんにちは」と、僕(ぼく)は頭(あたま)を下(くだ)げる。

「雄二(ゆうじ)かい？」

偶然(ぐうぜん)、通(と)りかかったただけだと言(い)うつもりだったのに、つい、うんと頷(うなず)いてしま(い)った。

「ごめんね、ブンちゃん」おばさんは、いきなりそう謝(あやま)った。

「え？」

「ケンカしたんだって？ まったく、あのばか。ホントにごめんね」

おばさんはパーマのかかったくしゃくしゃの髪(かみ)に手(て)を当(あ)てながら、僕(ぼく)に軽(かろ)く頭(あたま)を下(くだ)げた。

「いや、ううん、その……」

② 予期(よき)せぬ先制(せんせい)パンチ(パンチ)をま(ま)ったく別(べつ)の人(ひと)からもらってしまった気がした。

「ちょっと待(まち)ってね、今(いま)、雄二(ゆうじ)、呼(よ)ぶから」

おばさんは、玄関(げんかん)から階段(かたいだん)を見(み)上げながら「雄二(ゆうじ)、ブンちゃん(ぶんちゃん)がきてくれたよ。ほら、雄二(ゆうじ)、何(なん)やってるんだい、もうっ」と、大きな声(こゑ)で雄二(ゆうじ)ちゃんを呼(よ)んだ。

でも、二階(にかい)からの返(かえ)事はなかつた。

「あのグズ。ごめんね、今(いま)、とっつかまえて下(くだ)ろしてくるから」と、おばさんは腕(うで)まくりをした。

すると「オレ、会(あ)わねーから」と雄二(ゆうじ)ちゃんの声(こゑ)が聞(きこ)えた。

③ 「何(なん)、ごちゃごちゃ言(い)ってるんだい、お前は」

おばさんは、玄関(げんかん)に立(た)て掛(か)けてあ(あ)ったほうき(ほうき)をぐっとつかむと、勢(いき)よくつかかけを脱(ぬ)いで上(う)がり端(はな)に片足(ひとあし)を掛(か)けた。

「おばさん、いいよ」

僕(ぼく)は慌(あわ)てて声(こゑ)を掛(か)けた。放(はな)つておけば、雄二(ゆうじ)ちゃん(ぶんちゃん)はほうき(ほうき)の柄(え)で二(に)、三発(さんぱつ)は殴(なぐ)られそう(う)だ。

「拗ねちまって、男のくせにみつともない。ああいうのはガツンとやんないと」

「ホント、いいから」僕はおぼさんの袖をつかんで、大きく首を振った。

「だって、ブンちゃん」

無理矢理、雄ちゃんを引っ張つてこられても、気まずさが増えるだけだ。

「またくるよ」

「えー、そうかい、悪いね。コンバン、³ポカンとやつくから、ごめんね」お婆さんは、拳こぶしを握にぎつて息を吹ふきかけた。

「ねえ、おばさん、雄ちゃん、何か言ってた？」

「え、ああ」

おぼさんは、にやつと笑うと「転校生で高井くんっていう子がいるんだって？」と、訊きいてきた。

「う、うん」

「雄二が言うには、ブンちゃんがその子の肩④かたは、すっかり持つて膨ふくれてんだ。男のくせにヤキモチやいてんだね、あの子は」
ヤキモチ4つて。そう言われるとなぜか気恥きはずかしい。

「ほら、雄二はブンちゃんのこと大好きだから」

大好きはどうか。でも、いつも一緒いっしょだったし、楽しかったことは間違まちがいない。時々、面倒めんどうくさい存在ではあるけど。

「他^{ほか}には？」

「え、他に。いいや別に何も言つてなかつたけど。何かあつたの？」

逆に訊かれて、僕は大きく頭を振った。雄ちゃんは、僕が「うんこ屋」と言ったことは黙だまっていたんだと察した。

「おばさんさ、雄二がブンちゃんみたいな子と友達になれてよかったって思ってたんだよ。あれはブンちゃんと違って頭が悪いからね。普通は相手にされないじゃない？それに、ほら、うちの仕事がね。随分、学校とかでからかわれてるんだろーし、雄二には厭な思いをさせてるんじゃないかってさ。なのに、ブンちゃんは仲良くしてくれて」

そう言われると、^⑤後ろめたい気持ちになる。

「親として負い目があるもんだから、ねだられたら新しい自転車なんか買つてやつたりして。ブンちゃんなんか中学までちゃんと待てるのに。甘やかし過ぎだね」
あま

確かに物は買ってもらっているとは思うけど、お婆さんの叱り方を知っていると甘やかしているようには思えない。ただ僕だって、もしねだって買ってもらえるなら何でも買ってもらいたい。

「親なんて、みんな自分の子どもが心配でさ。ブンちゃんだつて同じでしょ」

「うちの親は違うけど……」

僕は小さく頭を振って溜息をついた。

「そんなことないよ。ブンちゃんのこと気にかけてるつて。子どものことを心配しない親なんていやしないよ。当たり前じゃないか。でも、いいよね、ブンちゃんは勉強ができるから。自慢じまんの息子むすこだ。鼻が高いだろうね。あ、こんなこと言うから、雄二がひがむんだね、ははは。でも、あれでいいところもあつてさ。勉強がだめだからつて別のことで目立って、あたしを喜ばせようとしたりするし。ま、運動会の駆けつこくらしいなもんだけどさ」

⑤ 普段おちやらけた雄ちゃんが運動会のトキヨウソウだけは真剣にはしるのは、そういうワケもあるんだ。おぼさんは雄ちゃんのことを可愛くて仕方がないだろう。羨ましさと少しの嫉妬を感じた。

「あ、ごめんね。つつい、つまないことばかり喋^{しゃべ}っちゃって。でも、あんなばかだけど、ブンちゃん、見放さないでね。中学校は一緒だけど、あの頭じゃ、ブンちゃんと同じ高校は受からないだろうし、もし別々になつてもかまつてやつて。ずっと一生、つきあつてやつてね」

知らないとはいえ、息子に酷いことを言った僕に、一生、友達でいてやってくれと頭を下げるおばさんの姿に、心の底からすまない気持ち^わが湧き上がってくる。

⑦「おばさん、雄ちゃんのことぶたないでよ。オレも悪いんだ」

僕はそう言つて玄關の外に出ると、二階の窓に向かつて声を掛けた。

「雄ちゃん、明日、登校日だな」

返事はなかった。

「じゃあ、学校でな」

開け放された雄ちゃんの部屋の窓に、風になびくブルーのカーテンが見えた。

僕は自転車に跨がると、もう一度雄ちゃんの部屋を見上げた。窓の縁の所に手が掛かるのが見えた。するとゆっくり頭が出てきて目の高さで止まった。隠れながら僕を見ているつもりなんだらうけど、バレバレだ。

「じゃあな」僕は後ろ向きに手を振った。

雄ちゃんちからの帰り道。ふと遠回りして、両親が働いている工場に立ち寄ろうかな、と思った。雄ちゃんのかあちゃんの話が聞かされて、親がなんとなく恋しくなつたからだ。胸の奥がむず痒いような、なんか妙な気分だ。

猛スピードで国道を西に向かった。掘つ建て小屋の工場が見えてきた。

僕は自転車をトタン(鉄板)の壁に立て掛けた。

「お盆明けまで? そりゃあ、無理だ」

正面に回ろうとしたとき、工場の中から父の大声が聞こえ、僕はひるんで足が止まった。

「え、はい。そうですか。じゃあ、なんとかしますよ。はい、はい。そういうことで」

チン。受話器を置く音が聞こえた。

僕は壁を背にして、そのままそこに腰を下ろして身を潜めた。

「何だつて?」母の声だ。

「お盆明けまでに、全部ノウニウしろだよ。ふざけんやつてんだ。お盆明けつてことは、こつちは休みなしで働けつてことだろ。まったくよ、ヤツらはお盆は休むんだらうが」

父は相当怒っている。

「たまには断つてもいいんじゃないの?」

「はか。そんなことできつこねえ。じゃあ、他に回すつて言われちまう。現にあのヤロー、いつつも、そういう匂わし方をする。脅しやがつて。それも偉そうに。クソ面白くねえ。前の担当者はいい人だったがな。あの若いのに代わつてから、いつもギリギリになつて言つてくる。去年のお盆もそうだった」

父の声は段々大きくなる。どうやら今夜は近寄らない方がよさそうだ。もうこのままここを離れよう。

「じゃあ、今年のお盆もどこにも行けないね」

「ああ」

「うちの子も、どつか遊びに連れてつてやりたいけど」

「だから、そんな暇がどこにあるつ」

「だったら、もう期待させるようなことは言わない方がいいよ。去年だつて、万博(一九七〇年に大阪で開催された博覧会)に連れてつてやるつて、あんだけ喜ばせておいて。フミが可哀想だよ。とうちゃんは、飲んじゃうと気が大きくなるんだから、気をつけなよ。ホント、悪い癖だよね」

「それとこれとは話が違ふだろ。オレだつて、ヤツらを遊びに連れてつてやりてえさ。だけど、仕事がなくなつちまったら、うちはやつてけねえぞ」

「そうだね」

「百姓やつてたつて、喰うだけしか稼げねえから始めた仕事だ。それにうちだつて建て替えてえしな。近所だつて、みんなうちを新しくしてる。オレだつて、うち建てるのが夢なんだからな。それには今、厭な思いをさせられようが、休みがとれなからう

が、我慢して働くしかねえだろ。稼いでうち建てたら、ヤツらにだって部屋も持たしてやれるし、新しい机だって椅子だって、お、ふかふかのベッドだって、全部揃えてやる。誰にも文句は言わせねえ」

「ホントだね。だけど、いつになったら楽になるのかね。あの子たちには、こういう思いをさせたくないけど。この先、どうなることやら……」

母が最後に大きな溜息をつくのが分かった。

「オレだって、あいつらの将来のことを考えてねえわけじゃねえさ。美幸(みゆき)はまだ分かんねえけど、文弘のヤローは、じいさんに似たんだろう、頭のできがいい。だったら、いい大学だつて行かしてやりてえしなあ」

「あれ、工場、継がせる気じゃなかったのかい？」

「こんなもんやっただつてしようがあるめえ。あいつがホントにできがいいんなら、下請けみてえにペコペコ頭下げる側じゃなくて、下げさせる方になんないや意味がねえんだ。それには大学くらい出してやんねえと。あいつには厭な思いはさせたくねえ。なのによ、まったく。親の心子知らずだ。あのヤロー、齒向かつてくるばっかりだ」

オレで期待されてるんだ……。あのとうちゃんが、オレに……。

「とうちゃんも、ちゃんとそういう気持ちを話せばいいんだよ。もう、ごまかしとか利かない年なんだから。いつまでも、文弘だつて子どもじゃないよ」

「そりゃあ、そうだろうが」

「とうちゃんが、ぶつきらばうに接するからじゃないのかい？ 不器用なんだから」

「そんなことはねえさ」

「まったく、親子して反抗期かい。こりゃあ、どうしようもないね、ははは」

両親の話を盗み聞きしているうちに、むず痒かった胸の奥が、次第に苦しくなってきた。

子どものことを心配しない親なんていやしないよ。雄ちゃんのかあちゃんに言われた言葉が聞こえた気がした。

なんだか急にすまない気がした。自分でもよく分からないまま、いてもたつてもいられずに、僕は立ち上がると、熱気の籠もった工場の中に入った。

「あれ、フミ。何しに……」

段ボールの裁断屑を集める作業をしていた母が僕に気づいて声を掛けた。

僕は母に答えることなく、段ボールの屑を工場の表にある屑山に運び始めた。今の僕にはそれくらいのことしかできないんだ。

「何やってるつ」父が怒鳴った。

「手伝う」

僕はひと言だけ答えると、また屑を抱えて表に運んだ。

「何が手伝うだ、邪魔だから帰れつ」と父が大声を上げる。

それでも力まわらず、また僕は屑を両手いっぱい抱えると、屑山に運ぼうとした。

「余計なことをするなつ」

苛立った父は僕に近づくと、僕の首根っこをつかんで工場の外へ連れ出し、突き飛ばした。僕は真後ろに尻餅をついた。転んだ勢いで屑が宙に舞う。僕は膝をついて地面に這いつくばると、散らばった屑をかき集めた。

「さつさと帰って勉強でもしろつ」

「たまには手伝えつて言つたじゃねえかつ」

拾った屑を屑山に捨てると、僕はまた工場の中に戻ろうとした。

「親の言うことが聞けねえのかつ」

父は僕を捕まえると、もう一度、そしてさつきより強く突き飛ばした。今度はヘッドスライディングをするように、僕は地面に横倒しに転んだ。

「とうちゃん、人通りがあるんだから、やめなよ」

母が駆け寄って、僕のズボンの汚れを叩いた。

「フミも、一体どうしちゃったんだい？ 何があつたんだい？」

僕はそう問いつける母の手を振りほどいて、工場の中へ向かった。

「しつこいヤローだな」と、父にまた突き飛ばされても、今度はよろけただけで転ばなかった。

工場の中へ戻ろうとする僕の前に父は立ちはだかつて、両手で僕の肩をつかむと、前に進もうとする僕を押し戻した。

僕は堪えきれなくなった涙をこぼしながら「手伝うんだ」と、足を踏ん張った。

「どうちゃん、手伝うって言うんだから、好きにさせればいいじゃないの。そういうところが不器用って言うんだよ」

母がふたりの間に割って入り、揉み合いになる。母が父の手を僕から放そうとしたとき、バランスを失った父が尻餅をついた。

「まったく、親子でばかなんだから」母が呆れたように言う。

「手伝うんだ……。手伝うんだ……」

僕は呪文のように、その言葉を繰り返した。

父はゆっくり起き上がって「バカヤロー。勝手にしろ」と言うと、それ以上は何も言わず、裁断機の前に戻ると僕に背を向けた。

母は僕の前にしゃがむと、服のあちらこちらに付いた埃を叩きながら「お前だって、なんでそんなに手伝いたいのか、わけを言わなきゃ分らないだろ」と言った。

⑨ 僕は全身を震わせながら鳴咽した。それでも母の問いに答えずに、工場の中に入った。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を手の甲で拭いながら、僕は裁断屑を何度も何度も屑山へ運んだ。

自転車のスタンドを立てる音が、寝床にいる僕の耳まで聞こえた。納豆売りのおばさんだ。

「今日もアツくなりそうだね」

「そうだね」

母とおばさんのやり取りが遠くに聞き取れる。

毎朝六時には必ず、納豆売りのおばさんが、この辺りの家を一軒ずつ回ってくる。牛乳や新聞の配達より早い。僕が生まれるずっと前から、おばさんは、たとえ大雨が降っていても、黒い合羽を着て回ってきた。おばさんが売っているのは三角納豆だ。うちの朝飯には必ず、その納豆が出る。

いつもなら、そんな物音が聞こえても、寝床から這い出ることにはなかったが、今日、学校で雄ちゃんと顔を合わすことを思うと、なんとなく寝てはいられずに、目を擦りながら寝床を出た。

網戸の外はすっかり明るくなっていて、枕元に置かれた蚊取り線香の白い燃えカスが、缶の中できれいな輪になっている。

僕は、隣でまだ丸まって眠っている美幸を跨いだ。

寝癖のついた頭を掻きながら、茶の間に行くと、父がお茶を啜っていた。台所からは味噌汁のいい匂いが漂ってきている。

僕は大きくびをすると、あぐらをかいて、父の正面に座った。

あの後も、父は何も言わなかった。

昨日の夕方、仕事を終えて工場を出るとき、僕が勝手に軽トラ（トラック）の二ダイに自転車を積み込んでも、そして僕も二ダイに乗って一緒に帰ろうとしても、父は何も言わずに軽トラを発進させた。

夕飯のとき、父は手酌（自分の手で酒を飲むこと）でコップ酒を飲んだ。それはいつもと変わらない父の様子だったが、ひとつだけ、いつもと違うことをした。酒のつまみ代わりにしていたメンチカツをひと切れ箸でつまむと、僕のサラの上に置いた。いや、置いたというには少しばかり荒っぽく、投げ分けたという感じだった。

父の口から「喰え」という言葉は出なかったけど、顎を少しだけしゃくってみせた。僕には、そのメンチカツのひと切れが、手伝いのお駄賃（おごち）のようで少しだけ嬉しかった。僕はメンチカツを箸でつまむと、黙ったまま口に運んだ。そして「お代わり」と茶碗を母に向けた。……二度目の大きくびをしながら、そんなゆうべの出来事を思い返した。

ちゃぶ台の上に朝飯のジュンビ¹²ができ、家族全員が揃った。母が納豆を掻き混ぜながら「納豆屋のおばさんも偉いねえ、女手ひとつで息子を大学まで出してやってさ」と、感心するように言った。

「フミもちゃんと勉強して大学行きな。かあちゃんたちが頑張^{がんば}つてやるから、ね、とうちゃん」

母のそんな問い掛けにも父は黙ったままだったが、昨日、工場で父母の話を立ち聞きしてしまった僕は、すまない気分になり「オレ、たまに手伝うから……」と、ぼそつと父に向かって言った。本当は、毎日手伝うと言いたところだったけど、不発弾探しのこともある。

父が何も言わない代わりに「そうか、とうちゃんの手伝いか、そりゃあ偉いな」と、ソフ¹³が僕を見ながら笑った。

「たまにだから。別に、偉くねえよ」

僕はてれくさくなって「歯、磨^{みが}いてくる」と、茶の間を立った。

¹⁴センメン所で、歯ブラシに練^ねり歯磨^{はみが}きを付けると、¹⁵ウラキドから井戸端^{いどばた}に出た。見上げた空は真つ青で、梢^{こすえ}のどこからか、山鳩^{やまばと}がホーホロ、ホーホロと気持ちよさそうに鳴く声が聞こえた。

(「夏を拾いに」森浩美)

問1 線部1～15のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問2 線部①「雄ちゃんちが近づくと、ゆつくりとペダルを漕いだ」(2ページ)とありますが、なぜ「ペダルを漕ぐ」のが「ゆつくり」になったのですか。三十文字以内で答えなさい。

問3 線部②「予期せぬ先制パンチ」(3ページ)とありますが、おばさんの行動はなぜ「僕」にとって「予期せぬ先制パンチ」のように感じられたのですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けんかしている雄二のことが気になって家まで来たが、それを知らないはずのおばさんから、突然^{とつぜん}謝られて驚いたから。
イ 雄二にけんかの件で謝らせようと思って来たものの、おばさんに先に謝られてしまい、出鼻^{でばな}をくじかれてしまったから。
ウ 偶然^{くうぜん}をよそおって雄二の家の前を通ったのに、自分から雄二を訪ねたことになってしまい、とまどったから。
エ ひどい悪口を言った自分の方から謝るのが当然なのに、おばさんから先に謝られてしまい、あわてふためいたから。
オ 自分はなかなか謝られなかったのに、けんかに無関係なおばさんはすんなり謝ることができたことにうろたえたから。

問4 線部③「何、ごちゃごちゃ言ってるんだい、お前は」(3ページ)とありますが、ここで「おばさん」は「雄ちゃん」をどう思っていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大好きなブンちゃんに会いたいと思いつながらも、照れくさくて顔を見せられない雄二がいじらしく、放っておけないと思っている。
イ けんか相手のブンちゃんが家まで謝りにきてくれたのに、顔も見せずにそっけない返事しかない雄二を薄情^{はくじょう}に感じ、憎らしく思っている。
ウ ブンちゃんがわざわざ家までたずねてきてくれたのに、変な意地を張って会おうとしない雄二がもどかしく、いらだちを覚えてる。

エ ブンちゃんに自分から謝りたくない気持ちはわかるが、表面だけでも謝ろうとしないがんこな雄二にがっかりし、残念に思っている。

オ いつも自分に歯向かってばかりいるが、人前でも親に反抗^{はんかう}する態度を見せる雄二の幼稚^{ようち}さにあきれかえり、腹立たしく感じている。

問5 — 線部④「肩^{かた}はつきり持つ」(4ページ)とありますが、「肩を持つ」とはどういう意味ですか。五字以内で答えなさい。ただし「」は含みません。

問6 — 線部⑤「後ろめたい気持ちになる」(5ページ)とありますが、「僕」が「後ろめたい気持ち」になったのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問7 — 線部⑥「羨^{うらや}ましさと少しの嫉妬^{しつと}を感じた」(5ページ)とありますが、「僕」がそういう気持ちになったのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問8 — 線部⑦「おばさん、雄ちゃんのことぶたないでよ」(6ページ)とありますが、「僕」がそのように言ったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おばさんの言うとおり雄ちゃんと一生つきあっていこうと決心したので、どんな困難でも二人で解決すべきだと思ったから。

イ けんかをしていても雄ちゃんとの友情は深いものであり、仲直りするまでもないのだが、けんかと無関係のおばさんにかきまわされなくなかったから。

ウ おばさんからくわしい事情を聞いても雄ちゃんが悪いのに変わりはないが、それを暴力で解決しようとするのは間違^{まちが}っていると思ったから。

エ けんかになってしまった原因はすべて自分にあるのに、僕に都合の悪いことを黙^{だま}っていてくれている雄ちゃんがぶたれるのは申し訳ないから。

オ 僕自身も悪いところがあつたのに、親への思いやりからけんかの理由を話していない雄ちゃんがぶたれるのはかわいそうに思ったから。

問9 波線部a「ひるんで」(6ページ)・b「ぶつきらばうに」(8ページ)の、ここでの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a ひるんで		b ぶつきらばうに	
ア	不思議に思つて	ア	不愉快 ^{ふゆかい} そうに
イ	興味をもつて	イ	愛想 ^{あいさう} がなく
ウ	混乱 ^{こんらん} して	ウ	感情的に
エ	おじけづいて	エ	むやみやたらと
オ	身がまえて	オ	意地 ^{いぢ} わるく

問10 — 線部⑧「親の心子知らず」(8ページ)とありますが、ここにおける「親の心」の内容としてふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 早く反抗^{はんかう}期からぬけだして親の言葉に耳を傾^{かたむ}けてほしい。

イ 仕事が忙しいが、本当は文弘^{ぶんひろ}たちを遊びに連れて行ってやりたい。

ウ いっしょうけんめい働いて家族にいい生活をさせてやりたい。

エ 今の工場のようなつらい仕事を文弘にはさせたくない。

オ 口では言わないが、文弘には自分の跡^{あと}を継^ついでほしい。

問11 — 線部⑨「僕は全身を震^{ふる}わせながら鳴咽^{おえつ}した」(10ページ)とありますが、本文全体における「僕」の親に対する思いの変化を明らかにした上で、僕が母の問いかけに答えることなく「全身を震^{ふる}わせながら鳴咽^{おえつ}した」理由を百二十字以上百四十字以内で説明しなさい。

問12 — 線部⑩「かあちゃんたちが頑張^{がんば}ってやるから」(12ページ)とありますが、なぜ「かあちゃんが」と言わず「かあちゃんたちが」と言ったのですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夫婦仲^{ふうふな}がよいことをあらためて示したかったから。

イ かあちゃん一人だけの力では実現できないから。

ウ 全員の気持ち^{きもち}がそろっていることを強調^{きょうきょう}したいから。

エ 何も言わない父の気持ち^{きもち}も代弁^{だいべん}したかったから。

オ 切れかけた家族^{かぞ}の絆^{きずな}をつなぎとめたいと思ったから。

問13 父と僕はどのような点が似ていますか。本文全体をふまえて五十字以内でわかりやすく説明しなさい。

(特に指示がない場合は、
、や。も一字に数えます。)

受験番号
国語

問 1		
11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

問 2

問 3

問 4

問 5

[illegible]

問 7

問 8

--

問 9

a
b

問 10

問
11

問
12

[illegible]

(二十字×十行)